

◎山におけるリーダーシップとパートナーシップ

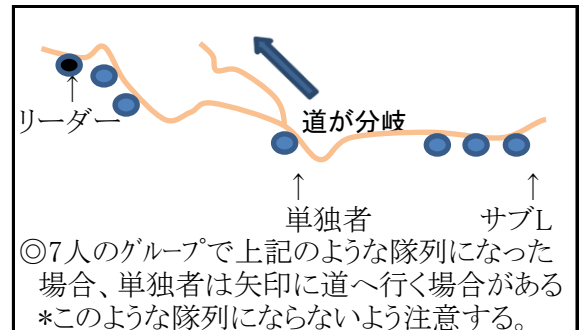
山登りをする時、単独行は別としてグループで行く場合、そのグループがリーダーによってきちんと纏められているかどうかは隊列を見ればわかる。右の写真の様に纏まっていれば、注意喚起等の伝言も伝わり易いし、すれ違い時に相手に迷惑もかけない。隊列がバラバラであれば前記した長所は生かせない。この場合リーダーの役割は大きく、これをリーダーシップと言う。また隊員の役割も重要であり、リーダーの指示に従って行動する事が基本で、これをパートナーシップと呼んでいる。今回はこれら関係について考えてみよう。そして実際に行動を起こしてみよう。



隊列が揃っていると気持ちが良いですね。



リーダーとパートナーの間隔は多くて3m以下。



隊の分断は危険



渡渉は水位が膝上の場合ザイルを張る



ガレ場は1人ずつ渡る

A.リーダーシップについて

①リーダーの役割と注意事項

リーダーの役割はそのグループの安全な山登りを推進する事であり、その歩く速度はグループの弱者に合わせる必要が有る。必要によっては弱者を2番手に据え、自分の歩行速度を調整しなくてはならない。通常は2番手との間隔は3mを越えない範囲で保ち、必要な指示等を発し、危険を排除して、隊の疲労度等をチェックしなければならない。またコースの時間配分にも配慮し、必要な指示を出さなければいけない。リーダーと2番手との間隔が10m以上空くような隊列はおかしく、速やかに3m以内に修正するべきで、これが出来ないようではリーダー失格。

②休息の取り方

休息は大切でこれがうまく取られていると疲労度に随分差が出る。山岳小説でもこれをトリックに使い遭難させた例もある。登山道の条件により差違はあるので、一律に決めるのではなく臨機応変の対応が必要である。通常「60分で10分の休息」等が一般的だが、私は「40分で5分」を推奨したい。どんなに汗をかいても5分休めば汗は引く。5分以上休むと次の行動を起こしづらくなる。また急坂の場合「30分で5分」を推奨する。無理して歩くと「足のツリ」が起こしやすくなりデメリットだ。また休息時は腰を下ろして足の筋肉も休めなくてはならない。

③やっではないけない事

仮に図①の様な隊列になってしまった場合、真中の単独者は道の分岐で矢印の方向に進んでしまう恐れがあり、誰も気付かない事もある。このような隊列になる事が問題でリーダーは常に後ろを注視してはならない。そして余程の事が無い限り、隊を分断してはならない。過去の遭難事例をみても隊の分断がその主原因になっている事が多いからである。故障者が出てやむを得ず隊を分断する場合はサブリーダーと補助者を付け、ペースを落とす事は構わない。この場合リーダーは新たにサブリーダーを選任し、目的地に着いたら後発組みのサポートに当たらなければならない。

また、気象条件や隊員の不慮の事故等で行動する事が困難な場合が生じた時は無理をせず、エスケープ等を使って行動を中止する。一番危険なのが、天候やメンバーの体調など把握せず突進した場合で、常に冷静な状況判断を下して行動する事が重要である。

④危険個所の通過

- ・雪渓等の登下降には隊列の間隔を各々3m位明けた方がよい。落石等の危険から被害を最小限にできる。また何かあったら大声で危険をみんなに知らせる事が肝要である。
- ・ガレ場、渡渉等の通過の場合、その場所に立ち入る人は1人とする事。これも最悪時の被害を最小限にするための方策である。特に増水時の渡渉に関しては必ずザイルしっかり固定し安全を確保する。

B.パートナーシップについて

①2番手の心理

今までの経験からすれば2番手の心理はリーダーとの距離が3m以上開くと追うのをあきらめマイペースになる。リーダーが気を使って遅くするとそのまま遅くなる。この心理を上手に読むのが優れたリーダーで前記した3m程の距離が重要なのである。

②無理をしない事

パートナーシップとは基本的にはリーダーに従って行動する事である。しかしリーダーのペースについてゆけない場合などは、その旨をリーダーに申し出てペースダウンしてもらいべきである。自分のオーバーペースをそのままにすると必ずシッペ返しが来る。そして結果的にメンバー全員に迷惑をかける事になる。これは自分の実力を普段から把握しておく必要が有る、その判断の基、行くべき山を選択して欲しい。